



【森本 千尋 常務理事 追悼号】



本法人常務理事 森本千尋氏が、令和2年9月23日(水)午前2時15分に逝去されました。享年63歳でした。

森本氏は、本法人のみならず札幌市における知的障がい福祉の向上・発展のために常に先頭を走り、多大なる功績を残されました。謹んで哀悼の意を捧げます。

本法人では、縁のありました皆様と故人を偲ぶお別れの場を設けたいと考えておりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から実現できませんでした。

そこで今回、不定期に発行している法人会報「朔人(さくっと)」を森本氏追悼号として編集いたしましたので、故人が生前お世話になりました皆様へお送りさせていただきます。

この未曾有の事態が収束した時、改めて皆様と思い出を語り合い、お酒好きだった故人へ盃を捧げる機会を持ちたいと願っております。

森本千尋氏を偲んで

9月23日に飛び込んできた森本千尋常務理事の訃報はにわかに信じがたく、今でも長引いた休みを詫びながら姿を現すような気がしています。

森本さんと初めてお会いしたのは私が手稲区役所福祉部に在籍中の平成13年頃でしたが、知的障がいのある方が生活するために必要な社会資源を住み慣れた地域に整備したいという強い熱意を感じました。

平成14年の法人開設から18年間、森本さんは「利用者のために必要なサービスなら制度が無くても作る」と信念を持って、次々と事業を立ち上げました。そして念願だった「親亡き後」の暮らしの場として高齢対応グループホームそら・あおぞらが完成した後も、森本さんは手を休めることなく3棟目の青写真を描き始めていました。3棟が揃ったところで自分の仕事は終わりと思い定めていたようです。

そんな最中、昨年冬から喉枯れに悩まされ精密検査を受けた結果、肺に初期のがんが見つかったと報告を受けた時は耳を疑いました。しかし1か月ほど入院・療養に努めれば、通院治療を続けながら仕事も可能との診断を受けて、森本さんは育成会へ入職して以来初の長期休暇を取ると決めたのでした。

6月、来月には戻るからと机も荷物もそのままに、森本さんはじゃあ行ってきますと告げて事務所を後にしました。その姿が最後になるとは思いもよりませんでした。本人も復帰を信じていたため、さぞ無念であっただろうと察します。

日を追うごとに改めて彼が遺した業績と喪失の大きさを感じます。残された者は悄然とするばかりですが、奮起して志を継いでいかなければなりません。最後に森本さんが船木宏通前理事長の葬儀で読まれた弔辞を引用してお別れの言葉といたします。

『お二人』が常に仰っていた「親身になって、親の身になって利用者と接しなさい」という言葉を胸に、『お二人』の想いを職員全員で具現化することをお誓いいたします。共に福祉に邁進できましたことは、私たちの誇りであり、宝です。

本当にありがとうございました。

社会福祉法人 朔風 理事長 中山 慶治

「ありがとう、そして…」

37年間という長きにわたり、ともに障がいのあるかた達の幸せづくりを担ってきた友人であり、同志ともいふべき存在であった朔風の常務理事、森本千尋さんが、9月23日の未明、静かに遠い世界へ逝ってしまった。

9月23日は、昭和～平成と札幌市手をつなぐ育成会が実施してきた「友愛まつり」の開催日と重なる。育成会の屋台骨を背負い続けてきた森本さん象徴する巡り合わせかなとふと思った。

今年の育成会の成人式・新年会のステージに、久しぶりに育成太鼓のメンバーと一緒に太鼓を打つ森本さんの姿があった。打ち終えた森本さんの表情に、どこか全てをやりきったというある種の清々しさを感じ、その時の表情がいつまでも強く心に残っている。

思えば、知人から「福祉の仕事をしたいという人がいるけど」と紹介されたのが森本さんとの出会いだった。国際障がい者年の翌年、まだまだ福祉サービスが充実していない時代、お互い時間に関係なく、社会復帰センターに通う方達の幸せづくりに取りくんだり、話し合ったりしたことが、懐かしさと楽しさを伴って思い起される。

社会復帰センター、職親会、社会自立センター、育成会と森本さんは、どこでも求められる役割を断らない人だった。その根底にあったのは、障がいのある人への優しい、温かな思いだったと思う。

育成会が「札親会」を設立した際に、自分は「札親会」に異動となったけれど、森本さんは、その後、混迷を深めた時期の育成会を支え続け、故弘津会長から出された育成会としての「運動体」と「事業体」という組織の在り方を検討してほしいとの宿題に対して、新たに社会福祉法人「朔風」を立ち上げるにより回答を出し、事業を発展させてきた。

「朔風」は、入所施設を持たずに地域生活を支えていくという法人の基本姿勢により、森本さんが社会復帰センターで働き始めた頃に出会った利用者のかた達が、年を重ねても安心して住み慣れた地域で暮らしていける「そら」そして「ほっと・あんしん・センター」の事業を次々と手がけ、3ヶ所目となる暮らしの場のグランドデザインを描きながらも、それを実現することなく逝ってしまった。森本さんの無念さに想いを馳せる。

新型コロナウイルスの感染拡大により、1月以降は会う機会はなかったけれど、5月下旬に「北海道新聞社の記者との電話対応をお願いしますか。自分は来週いないので」との電話が最後となった。声の調子から体調を気遣ったけれど、余りにも早すぎる突然の別れと「も・り・も・と・です」という電話を受ける日がもう二度とないことが、切なく、悲しい。

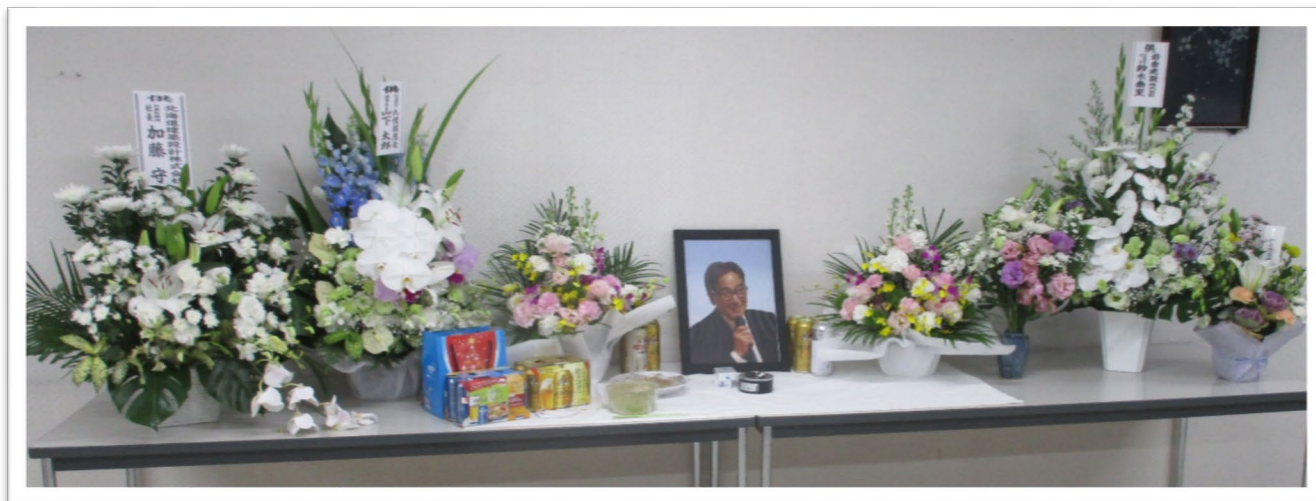
朔風と札親会は、それぞれに歩みながらも、障がいのある人達の幸せづくりをともに担ってきた。「これからの福祉の在り方を北から発信する」との想いを込めて森本さんは「朔風」を設立した。朔風の職員の皆さんには、森本さんの意を引き継ぎ、これからもしっかりと利用者を中心とした多様な事業を継続していくことを期待します。

森本さん、本当に長い間、お疲れ様でした。ありがとう。そして、さようなら。

社会福祉法人札親会 理事長 中原 明

朔人(さくっと)

【祭壇写真等】



朔人(さくっと)

今まで、ありがとうございました。



森本氏の略歴

昭和 57 年 9 月 【24 才】
社団法人札幌市精神薄弱者育成会の作業指導員として配属
昭和 63 年 4 月 【30 才】
札幌市社会復帰センター 主任指導員に昇格
札幌市社会復帰センター新築工事計画を担当
平成元年 1 月
成人式・新年会にて育成太鼓初披露
平成 2 年 4 月 【32 才】
札幌市社会復帰センター開設
札幌市精神薄弱者職親会事務局へ異動
平成 4 年 4・5 月 【34 才】
札幌市社会自立センターへ異動 開設
平成 7 年 9 月 【37 才】
札幌市精神薄弱者育成会事務局に異動
平成 9 年 6 月 【39 才】
札幌市手をつなぐ育成会事務局長に就任
平成 14 年 1 月 8 日 【43 才】
社会福祉法人朔風 設立登記
平成 14 年 2 月 【44 才】
授産施設やまはなワークス・通勤寮サポートやまはな開設
社会福祉法人朔風 法人事務局長に就任 (札幌市手をつなぐ育成会事務局長兼任)
平成 14 年 4 月 【44 才】
育成会より小規模作業所・復帰センター・生活寮を譲渡
平成 15 年 12 月 【45 才】
札幌社会復帰センター改め授産施設「ワークスふつき」を開設
平成 16 年 2 月 【46 才】
デイサービス「えるむ」・小規模作業所「ほぷら」開設
2階に育成会活動センター「いんくる」を設置
平成18年 4 月 【48 才】
通所更生施設ひのき・短期入所うみかぜ・GHとみおか開設
小規模作業所「ひいらぎ」開設
平成 18 年 5 月 【48 才】
札幌市手をつなぐ育成会事務局長を退任 兼務を解消
平成 19 年 4 月 【49 才】
生活介護事業所「つくし」開設
平成 19 年 11 月 【49 才】
「地域生活支援サポートやまはな」開設
平成 21 年 4 月 【51 才】
短期入所「つくしホーム」開設
平成 23 年 4 月 【53 才】
東日本大震災による東北被災地に向かう
平成 24 年 4 月 【54 才】
複合型施設「ささえ～る」開設
重度・高齢に特化したグループホーム「そら」高齢者棟開設
就労継続支援 B 型「ひいらぎ」開設
就労支援しごとサポートセンター開設
平成 24 年 5 月 【54 才】
社会福祉法人 朔風 常務理事・法人統括施設長に就任
平成 26 年 2 月 【56 才】
つくし地域交流多目的施設を開設
平成 26 年 4 月 【56 才】
札幌市指定管理「札幌市こぶし館」の運営を開始
平成 30 年 4 月 【60 才】
複合型施設「北 19 条ほっと・あんしんセンター」開設
生活介護「小春びより」開設 短期入所「じゅーく」再開
日中サービス支援型共同生活援助「あおぞら」開設
グループホーム体験利用室「青空ばかり」開設
令和 2 年 9 月 23 日 【62 才】
入院加療のところで永眠



【統括施設長挨拶】

8月末日、病気療養中の森本さんから電話があった。数分間話をし、絞り出すような声で、「ビール飲みてい、飲みに行きたいな」これが森本さんとの最後のことばであった。

私が、育成会に入職して25年事あるごとに酒を酌み交わし語り明かした。その中でも忘れられない事が何度かあった。育成会時代に小規模作業所団体の仲間が業務中の事故で亡くなった。大した保障も受けられなかったことを知り、「このままでは、利用者も職員も守ってあげられない」と言い朔風を立ち上げ、小規模作業所を順次、法定施設に切り替えていった。

朔風ができて間もない時に、利用者が亡くなり、その利用者の母親が「この子は親よりも先に逝って、親孝行だ。」と言われ、親にこんな事を言わせていいのか、子供が安心して暮らせる場をと作ったのが、重度高齢者対応のグループホーム「そら」だった。制度に無くても、利用者に必要なものは作っていく。森本さんの口癖であった。森本さんの思いや志がいっぱい詰まった「朔風の櫂」は、受け取りました。

いつの日か、森本さんの慰霊にビールで 献杯

【事務局長挨拶】

森本常務理事が急逝し、早くも2ヵ月余りが経過しました。6月3日から入院治療が始まりましたが、前日の6月2日に「必ず完治して元気になって復帰するから、留守の間法人を頼む。」と少しかすれた声で私の肩をたたいて帰宅されました。まさかそれが森本常務とお逢いする最後になるとは、全く想像もしておりませんでした。9月23日に逝去の一報を聞いたときは、唯々現実を受け入れられず、茫然として言葉になりませんでした。

私が朔風に入職して、約11年が経過しました。その間、森本常務には障がいのある方々の福祉の在り方や今後の課題、また法人の経営、運営について、時に優しく、また時に厳しく、深くて重みのある暖かい言葉でご指導いただきました。

今年に入り未知のウイルス新型コロナウイルスが世界中で蔓延し、テレビのニュースでコロナに関する報道を見ない日がないように思えます。コロナ対策として「三密」といわれる「密閉・密集・密接」というワードを幾度も耳にしますが、朔風は、利用者や職員が「安全・安心・安定」の「三安」をコンセプトにした法人になっていければと考えております。

森本常務が朔風を立ち上げた思いや志を引き継ぎ、思い描いていた朔風の夢の続きを具現化するために、残された我々役職員が一丸となって、朔風の今後更なる発展のために日々精進してまいります。

森本常務から教わった事や恩義は生涯忘れません。

本当にありがとうございました。



【編集後記】

早くも12月を迎え今年も残りわずかとなりました。いよいよ本格的な冬の寒さを迎えようとする中、皆様におかれましてはお元気にお過ごしのことと思います。

しかし、感染拡大が続く新型コロナウイルスの中で、まだまだ安心できるような状況にはありません。引き続きマスクの着用やこまめな手洗い、密を避けるなど、個人でできる対策の徹底や、感染が拡大する地域への不要不急の外出を控えなければなりません。

故森本常務もこのコロナ禍を大変心配しておりましたので、我々職員・利用者ともに、できる限りの感染症予防を徹底するとともに、体調には十分気を配り、健康に過ごしていく事ができればと思います。

それでは、皆様方におかれまして本年中は、ひとかたならぬお世話になりお礼を申し上げます。また、健やかに新しい年をお迎え下さいますよう心よりお祈り申し上げます。

編集者 小坂 昌正